

吉田三郎五郎

弟



赤田弦二郎全集

第十五卷



昭和十年五月五日印刷
昭和十年五月十二日發行

一冊・壹圓五拾錢

著者 吉田 絃二郎

發行者 佐藤 義亮

印刷所 富士印刷株式會社

製本所 植木製本所

東京市牛込區矢來町七十一番地

發行所

新潮社

電話（八〇五番・八〇七番・八〇八番・八〇九番）
牛込（八〇六番・八〇八番）

目次

白日の窓

高野山遍路	五
旅すゝろ	三
秋の落書	六
芳野紀行	四〇
麥三四寸	三
旅日記	七
梅雨ころ	五
北陸の旅	六
海の沈黙	九
笹鳴き	九
陸中平泉行	一〇三
静かに生くる人々	一一〇

上高地遊記	一七
春寒	一三
淡雪	一七
秋近く	一四
壁は孤獨であつた	一四
京の冬	一五
秋すゝろ	一五
静かなる日	一六
霧のなか	一七
白髯栗	一八
雪落つ	一八
月光讃	一六

霧島紀行

霧島紀行	二〇九
南薩をめぐりて	二一四
十日の旅	二五〇

旅	二五六
八月の霧島	二六六
光悦寺まで	二八一

春の日

俳諧寺一茶	二九
多日椿	三〇八
寒椿	三〇
牧場の春	三三
旅人	三八
草のごとく	三一
初秋はうれしけれど	三三
松島紀行	三六
六里ヶ原	三一
新春の旅	三三
永遠なる母	三五
眞澄遊覧記	三二

山を思ふ	三四
雑草の原	三七
花の散るころ	三九
日暮れたり	五一
吾木香	五四
夜明けんとす	五一
春の讚美	五六
人生に對する二つの立場	五九
大なる愚・自然の心	七五
ストロウを前にして	八〇
仙石原	八五
春日漫々	八六

歳晚雜記	三九〇
勸修寺のほとり	三九三
五月の光り	三九六
男體山	三九九
内村鑑三先生のこと	四〇〇
明月の夜	四〇三
雪	四〇七
天城の星	四一三
流れを慕ひて	四一四
櫻島	四一三
田園詩情	四一三
旅人のこゝろ	四二〇

霧島	四二五
農民の子バアンズの詩	四三七
二つの小論	四四三
乙女峠	四四六
草の涯	四四七
文學に志す青年へ	四五一
大阪城夜話	四五七
玉蜀黍の葉が	四六五
黎明の心	四七〇
依田老人の話	四七七
憂鬱なるゴルキイ	四八四

第五感想集

春	霧	白
の	島	日
日	紀	の
	行	窓

白
日
の
窓

高野山遍路

二十幾年振りであたくしは天下茶屋を通り過ぎてゐた。

秋も末ちかく、草の葉は枯れ、ボブラの葉は黄ばんでゐた。草紅葉の上には白い野羊がきよんととして電車をながめてゐた。

わたくしの頭に描かれてゐた天下茶屋はどこにもなかつた。わたくしはそれらしい草の丘を見た。葱畑を見た。しかしそのころの爪先上りの緒土道もなく、背の低い櫟くわしの並木もなかつた。

わたくしはテニスの「イン・メモリアム」の中で、あの詩人と友人アーサー・ハラムがかつて丘の上の道を歩いたくだりを讀むことに、天下茶屋のあのころの緒土道を聯想したものであつた。

低い丘であつた。わたくしは雲雀の聲をきゝながら堺から大阪への歸り路に天下茶屋を通つたのであつた。

麥畑もあつたであらう、桃畑もあつたであらうが、わたくしはたゞ雲雀の聲と、櫟の木と、丘から丘へと走つてゐた緒土道だけを記憶してゐる。

一人ぼつちで大阪の何とかいふ寺町に住んでゐたわたくしは、やはり一人ぼつちで春の暮れ方を大阪へ歸つて行つたのであつた。

あのころは高津神社も桃畑や麥畑の眞ん中であつた。茶臼山はすぐに麥畑につゞいてゐた。わたくしは暇さへあれば麥畑の中を歩いてゐた。

十六か七の一番感傷的な時代であつただけにあのころのことを思ひ出すと、自分自身の生活がどこからどこまでも

浪漫的な蒼白い月の光りにでもつゝまれてゐるやうである。

十八世紀から十九世紀初めにかけて英吉利の浪漫派の詩人たちの詩にはよく *sublime* といふ文字が見出されるが、まったく *sublime* な光りの中につゝまれたものを見ることのできる人たちは、どれほど幸福であるか知れない。浪漫的颜色はいつも *sublime* である。

そこには未知の世界に對するあこがれがある。そこには手に觸れられず、しかも手に觸れらるゝものよりはもつと確かな、もつと悠久な、もつと蠱惑的な或るものが潜んでゐる。何となしに深い影をもつてゐる。寂しくはあるが、胸をときめかす或るものがある。頼りなくはあるが、頼らないではをれぬやうな人生の深所が直ぐそこいらに見出されるやうな氣がする。翹望がわく。

あのころ見た天下茶屋には、たしかにまだ浪漫派の詩人の詩に見るやうな牧歌的な情趣が漂ふてゐた。わたくしはたゞ十軒にも足らぬ家を見た。見わたすかぎりたゞ麥の畑であり、諸土道であつた。

あの春であつた。わたくしは奈良からの歸りに法隆寺を通つて湊町の方へ行つた。その時も日暮れころであつた。わたくしは或る墓場を見た。墓場は麥畑につゝまれてゐた。墓場のうしろには枯れ木があつて、枝には三羽の鴉がとまつてゐた。一人の農夫が日の落ちるのも知らぬげに麥畑を打つてゐた。

「あの男もやがてあの墓場に眠らなければならないのだ。」とわたくしは少年らしい人生についての哀愁を感じたことがあつた。

あの時の印象だけは今日までも忘れることが出来ぬ。

チエホフ流に考ふれば人間は生まれて、生きて、苦しみ、戀をして、やがて頭を壁に叩きつけて死んでゆくばかりであるが、大和の麥畑の男たちは生きて、麥畑を打つて、働いて、やがて麥畑から三尺と離れぬ墓の下へ眠るばかり

である。

麥が芽生え、伸びる、熟^うれる。人は黒い麥畑の土を打つ。太陽は落ちる。人は死ぬ。

太陽は同じ麥畑の中に、幾萬年の間人類を見たことであらう。

一つの太陽は上り、落ちる。幾萬年の男たちが落日をながめつゝ麥を打つたことであらう。そして同じ土の上に死んだことであらう。

葦の中にはたくさんの蟹がある。そこには無数の蟹の穴がある。蟹は穴を出ては砂の上で兩手を動かしてゐる。その姿があたかも土を打つ人間のやうに見える。葦摺れの音がしても蟹は驚いて穴にかくれる。そして間もなくふたゝび砂の上に出て来ては土を打つ。

麥畑を打つ人間は永遠に一人の人間であるやうにも思はれる。かれは穴の中にかくれてはあらはれる蟹を聯想させる。父、子、孫……かれ等は生まれては土を打つ。生きては土を打つ。かれ等は人生について考へる。かれ等は哲學を持ち、藝術を持つ。しかしすべてはかれ等の頭の中に描かれた *visions* ではないか。かれ等は時が來れば穴にかくれる蟹のごとく寂然として土に眠る。何ものをも持たず。蟹の生活と人間の生活と、そこに何のけぢめがあらう。その儚さに於いて、頼りなさに於いて。

×

わたくしは南へ南へと走つてゐた。

生駒も、金剛も、葛城も纏々たる稻田をへだてゝ秋の半空を割^きつてゐた。稻は熟^うれ、霽^はり、刈られてゐた。

そこの稻村にもこゝの蘆草のはとりにも「わびしき刈り手」たちが枯れ草のごとく靜かに働いてゐた。

大和川をわたる時、わたくしはその平原の眞ん中に窯を焚き、土をこね、釉をかけて黙思しつゝある人のことを

思ひ出した。窯に飽けば大和川の岸に絲を垂れ、世を忘れてしまふかれの寂しい男らしい顔が。

薄暗い窓際で白い土をこねてゐる陶工の手は尊くもあるがさびしいものでもある。

かれが指端を動かすごとに白い釉を聯想させるやうなほの白い兎が作られ、人間が作られ、小鳥が作られる。びたびたとかすかな水管と、こねられた土の音が土間にひびく。

白い土の飛沫によごされてしまつた硝子窓の際には、作られたばかりの兎が、人間が、小鳥が立てかけられてある。柔かな秋の日はかれ等を照らす。

窓の外の無花果の下にも筵の上に並べられたほの白い人間があり、小鳥があり、獸がある。小壺がある。飾陶板がある。

まだ窯の火を浴びぬ人間や、小鳥や、小壺や、獸や八角壺や飾陶板は一樣にせまい筵の上の静かな未知の世界を樂しんでゐるやうだ。まつたくそこではほの白い土細工の人間も生き、小鳥も生き、飾陶板も生きてゐる。そこは童話の世界よりもつと静かな、もつと遠い世界である。

見よ、無花果の下の方の筵の上の土の人間の影を。影は五寸にも足らぬ。しかし何といふ遠い世界の影であらう。

見よ一枚の小皿の影を。影は三寸にも足らぬ。しかし何といふ尊い、静かな遠い世界の影であらう。ほの白い陶土のなかに洩れて来る遠いさゝやき。

わたくしの眼には、それ等の遠い世界の影に見入つてゐるであらう大和の寂しい男らしいかれの傍が映つて來た。くるくると轆轤臺の上に廻る白い陶土を見るのはさびしいものである。

土間には遠い過去の日から忘れられてゐる冷たい影が漂ふてゐる。

くるくると廻るごとにほの白い板のやうな陶土は、土間の冷たい影を土の中に拘き窄めてはいろ／＼な形にかはつ

てゆく。

くる／＼と廻るごとにはの白い柩のやうな陶土は、轆轤を踏んでゐる陶工のいろ／＼なわびしい思ひをも抱き容れてはいろ／＼な形にかはつてゆく。

かれが無花果の蔭の愛子たちを思ふ時かれの小壺にはかれの瞳の微笑がそのまゝに練りこまれることであらう。かれが大和川の釣りを思ふ時、かれの手の中の飾壺には明るい太陽とわびしいかれのユウモアとが織り込まれるであらう。

くる／＼と轆轤は廻る。

わびしけれどわびしけれど人は轆轤を踏み、土をこねる。

秋の影が、秋の寒さが、秋のわびしさがほの白い柩のやうな土の中に練りこまれる。

石を鑄む者、木を刻む者、土を練る者。

秋はわびしい。けれどもかれ等はひたすらに石を鑄み、木を刻み、土を練りて秋のわびしさをこめる。

ミケランゼロの石はミケランゼロの秋のわびしさをこめたものではないか。ダ・ギンチのカンパスはダ・ギンチの秋のわびしさをこめたものではないか。

無花果の下の土の人間、小鳥、小壺、八角壺を秋の日が照らしてゐることであらう。

わびしさを土の人間に盛り、わびしさを小壺に盛り、わびしさを八角壺に盛り、陶工等はくる／＼と轆轤を廻す。

×

攝津から河内と、こゝいらの平原には池が多い。池には菱のやうな藻草が多い。わたくしは菱の白い可憐な花を愛する。今は菱の葉はやゝ紅葉し、堅い實を結んでゐるころである。

菱の葉をわけて釣りを垂れてゐる人もある。赤い浮き、が池の静寂を一つにこめてゐる。そこにも秋の空が落ちてゐる。

千早口、觀心寺、ほとゝぎすの名所などいふ小ひさな山里の驛々を過ぎるころは、すでに道は坦々たる平原を過ぎて葛城の山近く美しい松山や、小川の多い山地にかゝる。

山はさして高いといふのではない、さして暗いほど茂つてゐるといふでもない。一口にいへば懷しまるゝ山である。小山の群である。柔かな小山と小山の迫つたところに碧珠のやうな谿川が流れてゐる。川を挟んで行儀よく石垣を築き上げた邸がある。白い土塀がある。白い倉がある。程よき勾配の屋根を持つた家がある。紀州近い秋の山はいかにも小春日和の靜かなあたゝかさを心ゆくまでに楽しんでゐる。

一つ一つの谿は廣くもなく、狭くもなく、四十戸或ひは五十戸くらゐの人家を容るゝに足るほどの擔がりを持つてゐる。

谿を出ればまた谿があり、そこにはふたゝび同じほどの靜かな村里を見出す。旅人は谿から谿へとつゝまじやかな一つ一つの村里を通り過ぎてゆかねばならぬ。

赤松と修竹の林を背景にして村は谿川に臨んでゐる。そこには熟れたる稻田が展げてゐる。熟れたる柿の實が屋根と、白い倉を飾つてゐる。紅葉した葛城の山脈が赤い柿や、青い修竹の間に見える。わたくしは不圖逍遙先生の「役の行者」の舞臺面を思ひ出した。柿の下で連枷を打つ娘たちや、嫗たちは姿も見えぬが。

空と空山と秋とのみが紀州境の村々を支配してゐる。

x

紀伊見峠には一人の友人がある。一度別れたきり七八年も逢つたことがない。紀伊見峠といへばどんなに峻しい山

かと想像してゐたが、わたくしの想像はすっかり裏切られてしまつた。

水の美しい、やさしい山である。あたゝかな小春日の日の光りが山をも稻村をも抱いてゐる。

河内を経て高野や、粉川寺や紀州の札所々々をめぐる遍路たちが今もなほ紀伊見峠を越えるのである。

千年の昔から日となく夜となく遍路たちがあの山の道を越えつゞけてゐるのかと思ふと、何の奇もない山であるがかぎりなく尊いやうに拜まれる。

「本來無東西 何處在南北」

遍路の言葉である。何といふあはれな 何といふ尊いあきらめであらう。

「東はわたしのものであり

西はわたしのものである」

ホイットマンの言葉である。

「西ひがしあはれさおなじ秋の風」

芭蕉の言葉である。

何といふ尊い、同じ心の言葉であらう。

わたくしは峠の友人の家を遠い山の上に思ひつゝ紀伊へ入つた。

×

紀伊見峠を越ゆれば山は展けて紀の川の秋の平原が横たはつてゐる。

高野の山、吉野の山とたゞ指呼の間に連なつてゐる。

紀の川の水を横ぎつて渡り鳥の群が葛城の方へ飛んで行つた。